

致知

September

9

2002

特集
◎



◎対談
丹羽宇一郎 VS 福地茂雄
「経営者は心を澄ませて決断せよ」

◎対談
塩谷信男 VS 渡部昇一
「宇宙の心に心を澄ませば
人は百歳まで生きられる」

◎対談
横田観風 VS 甲野善紀
「身体の神秘に心耳を澄ます」

心耳を澄ます

致知隨想

題字・三井住友銀行小山五郎名譽顧問

渡辺 進／中島邦雄
若松秀俊／徳川齊正
村松静子／遠藤 徹

掲載順不同

目次の挿絵を描き終えて

渡辺 進

平成八年の五月のことでした。編集部の方が来られて、『致知』の目次の上欄に一年間、挿絵を描いてほしいとの要請があり、その年の七月号からお引き受けしましたが、いつの間にか六年間も描き続けてしまいました。前任の方が、ごく簡潔に描いておられていたのを拝見して、気楽にお引き受けしたものの、このスペースは横に細長いので、

挿絵にする風景を選択するのに苦労しまして、大変な仕事をお引き受けしたと一時は後悔をしていました。

今までは静物でも風景でも、A版やB版サイズを横か縦にして、その中に収まるように描いていましたので、横に細長くモノを観る目を持ち合わせていませんでした。まずモノを観察する方法を変えなければと、意識改革から始めました。

面白く一度モノを観る意識が変わりますと、それが癖になって追って観察するようになり、追って景色に接したとき、これは挿絵になるだろうか、目を横に追って観察するようになりました。

私は生来凝り性なので、最初の挿絵が本誌に載ったのを見て「これは拙い」と思い、下手なりに努力して描かねば『致知』の読者に失礼と思い、それから日々エンピツをとってスケッチをするように心掛けてまいりました。

約束の一年が終わる頃、継続して描いてほしいと依頼され、遂に次々と延長していつて、遂に六年間となりましたが、私はこの六月で満八十歳になりましたので、この辺で辞めさせて頂きたいとお願ひして、六月号で終了したのです。

『致知』の読者層は日本の各界の指導者や、文化人であることを知り、また、誰でも必ず開く目次欄の挿絵ですから、あまり目障りにならない絵でなければいけないし、品格を重んじた絵でなければと、挿絵を描くことに努めました。

素人ですから、うまくなくて一所懸命に描いていると感じられるように専念してまいりました。そして、飽きられてもいけないと、半年を単位にテーマを変えて描いておりました。また、『致知』に合った絵はエンピツの細密画が適していると思ひ、7日から6Bまでを駆使して、時間を考えずに根を詰めて細かい絵を描き続けました。

絵の題材に向かつて、じつと観ていると、そのモノの本質が見極められるものだと思ひました。あとはゆっくりと描いてゆけばいいのですが、意外なほどモノの本質を雑駁に観ていたことを悟ったことが何度かありました。

一例を挙げますと、イガ栗を描いた時のことす。概念的にはイガは表皮の全体に万遍なく生えているものと思つていましたが、じつと見つめると、イガの裂け目に何か所か束のよう集中して生えていることを発見したのです。謎が解けたように、束になっている所から、放射状に針様になったイガを重ね合わせて描きましたら、栗のイガらしくみえる絵が出来上がつたのです。

私は画家に師事した経験がありませんので、光と影、遠近感、濃淡、硬軟などの状態を描き分けるために、いろいろと名画や参考図書を見て技法を勉強してきました。

挿絵を描き出してから絶えずスケッチ・ブックと、描き易いエンピツを持参するようになり、その準備を怠ったときは不安な気持ちになるといった習慣がつかけてしまいました。

以前から空の様子や、植物、昆虫、野鳥などを観察することが好きでしたが、挿絵を描くようになって、より緻密に自然を観察するようになりました。

雲の形や色の変化をどう表現しようか、風が通って湖面にさ